

大空のサムライ

今、新戸部稲造さんの「武士道」が見直されてきて、サムライが再認識されるようになった。きっかけは、どうやら、「流れる星は生きている」の中で、命からがら満洲から朝鮮半島を、ほとんど歩いて帰還した当時3歳の藤原正彦さんの著書、「国家の品格」にあるらしい。藤原さんは、英語なんか教えなくてもいい、「国語」だけが大事だと言いつづけている数学者である。(因みに、この表現は全く正しい。)

表題の「大空のサムライ」は2000年9月22日に亡くなられた坂井三郎中尉の著書である。すぐに世界中で翻訳されてベストセラーになった。ゼロ戦のエースである。(念の為「ゼロ戦」という名は、坂井さんも書いておられるが、戦後にできた言葉で、Zero-fighterと零式戦闘機を合わせた言葉である。今となつては時間が経ちすぎてわかりにくくなって、戦争中からそう呼んでいると思っている人までいて、ごっちゃになっている。だから今の常識で、当時のことをあれこれ批判したりするな、とずつと言いつづけている。今、小生の診療所に通っておられる高齢の方がいるのだが、戦争中は戦闘機に乗っておりました。レイセンに乗っておりました、とはっきり言われた。それだけで尊敬するのだが、それはともかくレイセンであつてゼロ戦ではない。レイセンは紀元2600年にできたからそう呼ぶ。)

いずれ必ず書きますが「超人伝説」という表現で、ある年の看護学院の講義のとき、90分まるまる、超人について話したことがある。無論、免疫学や感染症の話はまったくせずにである。するとある学生が来て、「あの話、面白かったから、次の時間にも同じようなことを話せ」と言われたが講師をクビになるから、と断つた。クビになるのがこわいのではなく、他にも伝えておかねばならないことが山ほどあつたのである。それほど好評だつた。

坂井三郎さんは、この超人伝説の中に必ずでてくる人である。すなわち、「真昼に(日光が輝いているとき)星をみた」と言っておられる。「坂井の視力は2.5」といわれていて、敵に先に見つけられたような感じをうけたことがなかった、とも言っておられる。生涯64機を撃墜した。(戦闘機乗りのエースとは、5機以上を撃墜した者のみが名乗る資格がある。秒速150メートル以上の速さで飛び交っている飛行機に弾を当てるのは至難の技である。)

坂井さんが、外国人記者クラブの講演で、「ごらんのとおりの片方の目は義眼です。私はこれを戦争で失つたが、ぜんぜん戦争を恨んではない。あれは素晴らしい、意味のある戦争だつた。強いて私が後悔するなら、たくさんの優秀な部下をなくしたことだ。それ以外に後悔はない。」と言いつつたら、聴衆が静まり返つたという。そしてニッコリ笑つて、「だって皆さん、そうじゃないですか。あの戦争が終わつて国際連合にたくさんの国が誕生して参加しました。一国一票を持って人類の歴史を左右する権利を持った。みんな白人の植民地だつた国だ。やつと有色人種が世界の舞台に出た。その引き金はあの戦争ですよ。」白人たちは、みな嫌な顔をする。石原慎太郎だけが拍手したという。(H14.11.16.産経新聞)

いつも背中をピシッと伸ばして姿勢がいいし、気骨も品もある尊敬すべき紳士である。

この坂井さんがある頃とんでもないことを言っただけで、という話がある。話とは、ある日電車の中で、向い側に座った男子学生の会話で。「おい田中知ってるか？50年前な、アメリカと日本が戦争をしたんだってよ」「エーッ、ほんと！マジ？」「マジだよ、お前」「フーン、マジか。で、どっち勝ったの？」というような話である。小生、最初に知ったのが山本夏彦さんの著書だったので、夏彦さんの作り話だとばかり思っていた。近頃の学生はすることがないから、学校にでも行くか、といったレベルのが増えたから。それにしても、これはひどい。本人の頭も悪いが、歴史の教育に欠陥があるに違いない。

モンゴル、帰国の空港で長椅子に座っていた。うしろで、男子学生が話している。「ネエ、結局、チンギス・ハーンてなに？」「うーん、つまり、源義経さ」「フーン？」椅子からすべり落ちそうになった。

こんな連中をウロウロさせるために、坂井さんはゼロ戦で戦ってきたわけではない。特攻隊の若い戦士も、こんな連中のために命を捨てたわけではない。若い人（つまりあとから来る人）に伝えておきたいことが山ほどあるのだが（機会があれば書きますが）、「大空のサムライ」は是非お読み下さい。今、文庫本で出ている。

映画トラトラトラで、三船敏郎扮する山本五十六提督が、「源田のいったとおりだ・・・」という台詞があったが、源田は多くの参謀の中のひとりにすぎない。山本大將は、むしろ黒島参謀を信用していたというし、坂井さんは「源田は戦闘機で敵を撃墜した人ではない」と冷やかに書いておられるが、戦後長生きして空幕長になったから源田サーカスなどと、敵のいない空で曲芸飛行などをしていたり、いろいろ意見を言えただけのことである。日露戦争のときの東郷提督と秋山参謀になぞらえられていた参謀は樋端（トイバナ）である。香川県の人にはよく知られている。現に樋端久利雄航空甲参謀中佐は、山本好みの秀才で、山本五十六に呼ばれ劣勢の日本軍を立て直すために作戦を立案していたし、提督と同じ飛行機に乗っていて、ブーゲンビル島に墜落して亡くなった。葬式の時、香川県知事の献花がはしっこの方にあっただけというし、樋端神社というものまであった。この人の業績はほとんど知られていないのであるが、時代を超えた天才であったことは間違いない。・・・前後を通じてとびきりの成績であったということは、1年下の源田や淵田美津雄（真珠湾攻撃隊長）らよりも当然ながらはるかに期待されていた。

われわれが学生の頃の教授は、海軍出身で、世界中をまわっておられたが、あるときアフリカのアルジェリアだったかナイジェリアだったかで突然「おれはアドミラル・ヤマモトを尊敬している。」と言われて面食らったそうである。どこかで聞いたような名前だな、と初めは思っていたそうだが、「あの鬼畜米英を相手に、果敢に戦争をして抵抗したではないか」とその土地では今でも尊敬されているという。日本の歴史では忘れられたような、

あるいは忘れたいような表現にでくわすことがあるのだが、当時の人々の立場、あるいは状況に立脚してものごとの判断をしないことには、彼らに対して失礼なることこの上なし。つまり、くりかえすが、現代の常識で当時のことをあれこれ批判するのは間違っている。